

北海道北広島市立東部中学校

電子黒板を日常的に活用し 手法は教科を超えて共有

前号で述べた通り、ICTを使いこなす人材の育成は、機器の整備と共に重要な課題である。今号では、「言語活動の充実」の研究の一環として、ICTの活用を盛り込み、授業交流で活用の観点と手法を共有することによって、若手からベテランまでほとんどの教師がICTを日常的に活用するまでに至った取り組みを紹介する。

School Data



北海道北広島市立東部中学校

◎ 1947 (昭和 22) 年開校。「夢をもち たくましく」を学校教育目標に掲げ、「心知体労」を育む活動に力を入れる。野球部が 2013 年度全国大会出場。校長 田島郁夫先生 / 生徒数 405 人 / 学級数 15 学級 (うち特別支援学級 3) / 所在地 〒061-1115 北海道北広島市美咲野 1-12-1 / TEL 011-372-3030 URL http://kitahiro-tobu.com/public_html/

北広島市立東部中学校の千葉貴志先生は、教室に入ると、まず黒板の横に備え付けてあるスクリーンを引き出した。大きさは、黒板の半分を占める 80 インチだ。そして、天井に備え付けのプロジェクトターのスイッチを入れ、タブレット端末を接続した。「教科書の 50 ページを開いて」と千葉先生が言うと、生徒は教科書を開きつつも、さっとスクリーンを見る。千葉先生は、ス

クリーンに映し出されたグラフにホワイトボード用マーカーで線などを書き足しながら説明し、生徒の表情を見てその理解度を見取っていく。続く問題演習では、生徒に配布したプリントと同じものがスクリーンに映し出された。指名された生徒が前に出て、解答を書き込む。そして、千葉先生は生徒の書いた解答に書き加えながら、解説していく。

「生徒の手元の問題と全く同じものをスクリーンに映すので、生徒は紙と黒板とを見比べる必要がなく、私の説明を集中して聞いています。一方、私は黒板に問題を書く時間が省け、生徒のグループ学習や個別指導に十分時間を充てられるようになりました。急いで進めているつもりはありませんが、例年より授業が速く進み、余裕を持って年度末を迎えられました」(千葉先生)

活用法を授業交流で教科を超えて共有

東部中学校では、大半の教師が千葉先生のように日常的に ICT を活用しながら授業を進めている。同校では 2010 ~ 12 年度に「生き生きと自己表現し、考えを深め合う生徒の育成―言語活動を活かした授業の研究」を主題として校内研究を行った。その過程で、12 年度に「北海道放送教育研究大会」の会場校となることが決まり、放送教育と ICT の活用も念頭に置いて研究が進められることとなった。一方、北広島市教育委員会は「学校 ICT 環境整備事業」を推進し、11 年度に市内の公立小・中学校全ての教室にプロジェクトターとスクリーン、ハードディスクレコーダー、無線 LAN を設置した。こうして東部中学校に ICT 活用を推進する意識と設備の両面が整った。同校は、全教師が取り組む授業交流週間を年 2 回設け、教科を超えて授業を見合い、



北海道北広島市立東部中学校
校長

田島郁夫

たじま・いくお 「授業を生徒目線で見て、気付いたことを先生方に伝えるようにしている」



北海道北広島市立東部中学校
教頭

津谷昌樹

つや・まさき 「本校の環境を生かした指導が出来るよう先生方を支援したい」



北海道北広島市立東部中学校
千葉貴志

ちば・たかし 1学年担任。技術科・数学科。前研究主任。「生徒がより理解できるように指導力を上げていきたい」



上/写真1 千葉先生の授業の様子。スクリーンに映したワークシートに生徒が解答を書き込む



右/写真2 体育の授業では、空手の演武を録画し、その場でチェックする。生徒は自分の動きを客観的に確認でき、教師は具体的に指示できるという

工夫を共有し、改善点を話し合った。その際、学習効果を向上させるツールとしてICTの活用を条件として付けた。田島郁夫校長は、ICT活用の留意点をこう話す。「ICTはあくまでも道具です。活用の意図と活用場面をしっかり練り、ICTが適している場面に使ってこそ、効果があります。その観点と手法を教師間で共有するようにしました」

例えば、英語では、フラッシュカードやCDといった教具がパソコン一台に収まって指導の効率化が図れると共に、音声に合わせて画像が自動的に変わるなどの指導改善にもつながる点が評価され、ICTを活用する教師が増えた。また、教師にとって使い勝手がよいタイプの電子黒板であることも、日常的な活

用につながっていると、津谷昌樹教頭は説明する。

「本校の電子黒板は横から引き出すスクリーンタイプなので、場所を取らずに置き、しかも準備が簡単です。スクリーンには電子ペンでもホワイトボード用マーカーでも書き込めますし、黒板に投影すればチョークも使えます。設置から3年が経ち、プロジェクターの電球をいくつも交換するほど、どの教室でも活用されています」

「黒板の半分がスクリーンで占められるので、残す情報を書く黒板と、消えてもよい情報を映すスクリーンをうまく使い分ける必要があります。使い方が固定されず、教師がそれぞれ使いやすい方法を選べるのが浸透した一因だと思います」(千葉先生)

生徒にとってもICTは日常的なもの

校内研究のテーマは13年度に変わったが、教師のICT活用の状況は以前と変わらない。新しい指導案の様式にも、「ICT機器の活用」の項目は継続された。

「ICT活用度は教科特性に応じて異なりますが、その有効性は全員が認めています。視覚的な情報を加えて説明を補足する役割や、授業の効率化による時間の捻出など、教師の指導の幅が広がり、指導力向上につながりました」(津谷教頭)

生徒も授業の変化を感じている。文教科

学省「全国学力・学習状況調査」の12年度と13年度の結果を比較すると、「普段の授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う」の肯定率が31ポイント増、「普段の授業では、本やインターネットを使って、グループで調べる活動をよく行っていると思う」の肯定率も14ポイント増だった。更に、13年度に始めた学校独自の生徒による学習実態アンケートでは、「教材(視聴覚教材、電子黒板等)でわかりやすくになりましたか」の肯定率が大半の教科で9割を超えた。生徒にとって、言語活動もICTも日常のものになっている様子がうかがえる。

それだけに、今後問われるのは生徒の理解度を深めることだと、千葉先生は言う。

「生徒は前を向き、うなずきながら授業を聞いています。しかし、定期考査の得点が伸びているわけではありません。知識を定着させ、理解を深めるための工夫が課題と感じています」

「ICTの進展は、教師の指導法に大きな影響を及ぼしました。しかし、単に便利という理由ではなく、授業のねらいに照らし合わせて、指導過程、学習形態などを工夫してICT活用を考えなければ、授業力の向上にはつながりません。今後も、生徒の確かな学びを育てる授業改善を推進していきたいと思います」(田島校長)